

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	図画工作・美術科の授業見学における分析視点：「美術教育概論」授業に向けて（1）
Author(s)	向野, 康江
Citation	茨城大学教育学部紀要. 教育科学, 67: 205-219
Issue Date	2018-01-30
URL	http://hdl.handle.net/10109/13450
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

図画工作・美術科の授業見学における分析視点
—「美術教育概論」授業に向けて（1）—

向野康江*

（2017年8月31日受理）

Analytical Methods for Viewing Lessons of the Arts Educations :
“Introduction to Art Education” Series (1)

Yasue KOHNO*

(Accepted August 31, 2017)

はじめに

教育学部教員養成課程に入学した皆さんは、いきなり図工や美術の授業見学に連れていかれて、どこをどう観察すればよいのだろうか、困惑した経験はないだろうか。極論すれば、現代の美術教育の意義や方法もわからず、自分の経験則でほんやり授業を観察しても時間の無駄というものである。また引率する側としても、ただ授業見学する学生を校務の一環として引率し、見学させるだけはさせて、後は何ら手を打たないのでは、「教育」というにはものたらない。本来、授業の実際に触れて、モチベーションを上げるべき授業見学によって、かえって教師を志望するモチベーションを低下させていることに気づかないのであろうか。

論者は、現在、新しく「美術教育概論」の授業内容の構想を練っており、「「美術教育概論」授業に向けて」の（1）として、美術教育関連授業の見学の視角について論じることとしたい。

1. 本稿執筆者の授業見学記録の復元と見解

「はじめに」において「困惑した経験はないだろうか」と問題を投げかけた。実は論者にはそうした経験がある。当時論者はそうした経験に基づき、若干の記録を作成していた。ここに掲げる授業見学の実施日は1995年2月25日。今から20年以上も前の記録である。

当時、論者は茨城大学に就職する以前のことで、大学院生最後の時期にあたる。したがって、本格的に図工科や美術科の内容、指導方法の研究に従事する前の体験ということになる。論者は、教育の実際には携わらないものの、関心を寄せる一個人として感じたことを書き留めた。なぜ、古い

*茨城大学教育学部美術教育研究室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Laboratory of Art Education, College of Education, Ibraki University, Mito 310-8512 Japan）.

記録をもち出すかという点、当時学ぶ側に身を置いていた論者の困惑が鮮明に刻印されているからである。まず紹介し、その上で、検討を加えることとしよう。

1-1 授業光景メモ

1-1 (1) 授業前半のメモ

分析対象授業：T 大学附属小学校，学習公開・初等教育研修会，第2学年第4部 図画工作科
単元・題材名：楽しい遊園地－発砲スチロールと身近材を使って－

教 師：H.H

対 象 学 年：小学校2年生

実 施 月 日：1995年2月16日（木）午前9：10～10：50

実 施 場 所：東京都内小学校 図画教室

関 係 資 料：申込時配布資料14頁………1部

：授業担当者当日配布資料………1部

：会場案内図

板 書 内 容：「楽しい遊園地」こんな遊園地があったらいいな

【授業光景メモ】

【状況1】 停電のため、教室が暗い。（停電は午前9時35分までつづく）停電なので、電気鋸は使用できない。

【感想1】 このようなとき、教師はどのように対応すべきか。経験豊富なベテラン教師は、落ち着いていられるだろうが、教育実習生などは、かなり緊張するのではなかろうか。

【状況2】 ニクロム線によって発砲スチロールを切る、あるいは溶かし始めた。

【感想2】 授業開始の第一印象は「面白い！」である。「ニクロム線によって発砲スチロールを切ったり、溶かすのは面白い作業だろうな。昔やったことがあるけれども面白かったな」と思った。

【状況3】 目をつけた活動グループは、教壇より右側のメンバー「三浦、松田、松原、松浦、横田、飯田、城景、中川」である。

【感想3】 このグループに着目した理由は、教師から遠い位置にいて、どのように活動するか興味を覚えたため。

【状況4】 横田が紙粘土を丸くしている。中腰で「エブリバーディー………」と唄いながら粘土板の上で丸めている。

【感想4】 なぜ、人は作業をするとき、鼻歌を唄ったり、調子をとったりするのか。

【状況5】 松浦と横田は話し合いながら丸くしているが、作業はいっこうに進まない。丸くしては潰す。

【感想5】 作っては潰す、潰しては作る、という動作は、教育上どのような意義をもつのかなのか。

【状況6】 飯田があきれ顔で様子を見にくる。横田は相変わらず「エブリバーディー………」と唄っている。松浦と横田は、紙粘土を粘土板に叩きつけている。飯

田がついに2人の様子を見ながら笑い始めた。

感想 6 飯田は2人の何がおかしくて笑い始めたのか。子ども同士の感情移入、同情とはどのようなものか。

状況 7 三浦がコココーラの2リットルボトルをもって来る。三浦は、松浦と横田に「何やってんだ。ねえ、それに何をつける?」と聞いている。2人は答えられない様子である。

感想 7 2人が答えなかった、という事実からこの行動は、何か創造するための作業ではないことがわかる。

状況 8 三浦、城景、中川は楽しそうに話しながら作業。特に城景はうまくニクロム線をつかって細かな作業をしている。松原は真剣にまじめに作業している。松浦と横田の様子を見て、まじめに作業するよう、うながそうとするかのように、彼らに「止めるよ。」といった。

感想 8 松原は、松浦と横田の行動が創造するための作業ではないことがわかっている。飯田とちがって笑わないで怒り出すのはなぜか。

状況 9 松浦と横田は、粘土板に叩き付けてつぶれてしまった粘土をそのままにして、どこかに行ってしまった。三浦、城景は、仲良く2人で作業。2リットルボトルを3つ組み合わせて、その上に発砲スチロールを飾ろうとしている。三浦はにこにこしている。

感想 9 三浦が乳幼児のようににこにこしているのは、この子の資質なのか。

状況 10 松原はしゃがみこんで、ひたすら1m×45cmほどの発砲スチロール板に、黙々と飾り付けをしている。突然、松原が2リットルボトルをにぎりしめ、H先生のところへ何か頼みに行く。H先生は、他の子どもの相手をしていたが、松原から何か聞き取ると、それをゆっくり一つ一つ片付けた。そして、松原から2リットルボトルを受け取った。このときの先生の行動は落ち着いている。次々生徒（ここでは児童のこと、以下ママ）からの頼みごとが来てもあわてない。H先生と松原は黒板の方へ進んで行った。黒板の横には、電気鋸が据え付けてある。H先生は、電気鋸のスイッチを入れた。すでに、停電のトラブルは解消されている。松原から受け取ったボトルを電気鋸の刃にあて、すばやく真二つに切断した。切断しているときの音は、児童たちのおしゃべりとまざって一層教室を騒がしくした。さらに先生は、松原の目の前で、切断したボトルの縁のぎざぎざを、はさみで切り取り、安全にしてやった。

感想 10 ボトルの切断面を安全に処理してやるとは予想しなかった。松原は、先生が切り落としていくぎざぎざをじっと見つめることで、何かを学び取っているはずである。

状況 11 松原はその作業を、はさみの動きに応じて見ていた。

感想 11 このような点に教育的効果が出てくるのではないか。

状況 12-1 そして、先生から切断されたボトルを受け取ると、スプレーで色を付けに行った。松浦と横田は、まだ帰ってこない。やたら大きな塔を立てている女の子3人が、「先生〜!」と呼ぶ。その声の方向の延長線上に、スプレーによる色付け場がある。松浦と横田も、その色付け場にいる。

停電のため、使用するはずの電気鋸が使用できなくとも別に支障はないわけで、発砲スチロールを切る道具であるニクロム線は電池式のものであった。確かに、ニクロム線によって発砲スチロールを切るのは面白い作業である。この時点で、題材の目的が何であるのかを確認すべきであった。

つまり、この題材によって何を育成しようとするのか、素材とそのねらいが整合性のあるものか否かを確認すべくであった。

素材は、横田君が丸くしていた紙粘土も使用している。作業をするとき、鼻歌を唄ったり、調子をとったりするのは、すでに行為に飽きているからであろう。作っては潰す、潰しては作る、という繰り返しの動作がその証拠である。子ども同士、何をしてよいのか、イメージ形成ができていないことが相互にわかっているのである。三浦君が松浦、横田君の両君に「何やってんだ。それに何をつける？」と聞いても2人が答えられないのは、何を創り造ってよいのか、イメージが固まっていないのである。

城景君がニクロム線をつかって細かな作業をしているのは、すでに何を製作するのか、イメージが形成されているからである。松原君もそうである。彼が松浦、横田の両君にまじめに作業するように促しても彼らには自分たちの居場所がないのである。グループ学習の困難さは、グループの組織員全員に完成形への合意がないと活動が展開していかないところにある。飯田君が松浦、横田の両君に対して怒り出すのは、合意を実行しないからである。この怒りを避けるために2人は粘土をそのままにして、どこかに行ってしまったのである。

ペットボトルを組み合わせて発砲スチロールを飾ること自体、適切な素材であろうか。教師が切断したら、児童には切断技術は獲得できない。切断面が乱れていて、それをはさみで整えることは知ることになる。これは技能的な学習内容の伝授的な獲得である。そもそもペットボトルも発砲スチロールも着色しにくい素材である。

1-1 (2) 授業後半のメモ

状況 12-2 午前9時48分、先生が「今日は1時間しかないので、これでおしまいにします。」という。なかなか終わりそうにない。再び、「あと2分待ちます。」と先生が発言する。生徒から、「あと2分だけ？」と大きな声が飛び交う。みんなが片付けに入り始めた。松浦と横田の紙粘土は、まだ片付けられていない。そこへ、松原がもどってきた。先生：「お客さんがいるから、そのまま座ってください。作品は、あとでもって行ってもらいます。」
松浦と横田がもどってきた。
児童：「先生！座れない！」
先生：「そのまま立っていてもいいですよ。」

松浦と横田と松原で、半ボトル5つを組み合わせている。その様子を見て、松田が「オー、できたじゃん。」と発言。

感想 12 先生が作業の中止を呼びかけた頃に、気持ちのがのってきている。あせりが生じているのかもしれない。

状況 13 松浦と横田と松原の3人とも、先生の指示を、まったく聞いていない。3人とも半ボトル5つを組み合わせるのに夢中になっている。

先生：「まだ、お話をしている人がいる。」

松浦と横田と松原の3人が、それぞれ席に着く。先生の口調を敏感に聞き取っている。

先生：「来週の火曜日に仕上げます。今日は、せっかく乗ってきたところで終わりです。では、日直の人！」

日直は横田であった。松浦がにらみ付けた様子で私の顔を見た。この子は髪の毛が少し赤い。色もミルクのように白い。

感想 13 松浦は他の子どもとちがって人に見られるのを嫌がっている様子。ハーフぽい容貌から、よく人にじろじろ見られるのかもしれない。

状況 14 日直として先生から呼ばれた横田は、黒板を背に、一番前で体操をしている。

感想 14 なぜ、パフォーマンスをするのか。誰かが見ていようがいまいが、このようなパフォーマンスをする。それはなぜか。

状況 15 先生は男の子、女の子の作品を取り上げ、まとめに入る。

先生：「すごいね。あとどうするの。動物園を作ったのか！」

その間、松浦はボトル5つにさわって組立している。横田は体操している。松原は自分の作品をじっと見ている。

児童3人：「遊園地を作りました。」

先生：「これがぐるぐるまわるんだ。水が入っているんだね。すごいなー。」

感想 15 端の子は見えにくい。先生の方に、横田のようなパフォーマンスが欲しい場面である。松原はよく友達の作品を見ている。松浦は球状の発砲スチロールに針金を刺し、それを振り子のように揺らしている。すぐに球状スチロールを自分の顔にぶつけはじめ、ポンポンとリズムを取りながら、友人の作品発表をちらりと見た。

状況 16 端の席で見えにくいにもかかわらず、よく先生が取り上げた作品を、松原は見ている。その点では、「真面目」といえる。しかし、その真面目さが何に基づくものかはわからない。

横田は、最前列の机の前で、ふざけながら友達と話していたが、先生にうながされて、日直の挨拶（授業終了の挨拶）をした。そして、自分の席にもどってきた。全体が片付けに入る。

三浦が作品をもちあげて片付ける。まず、自分の紙粘土を片付けたのは、松原だった。松浦、横田の粘土は、床の粘土板の上でつぶれたままである。横田はニクロム線と電池を片付ける。

感想 16 松浦、横田がつかった粘土と粘土板は、いつ片付けられるのか？松浦、横田は、自分たちがあれほど遊んだ粘土をなぜ片付けないのか。あれほど楽しんだ粘土に愛着を持たないのはなぜか。

状況 17 松原が、その粘土だけ拾っていった。粘土板はそのままである。さらに彼は、別の粘土板を片付けた。松浦、横田がふざけて遊んだ粘土板はそのままである。

先生から、要らなくなった発砲スチロールをゴミ箱に入れるよう指示が出る。みんなで拾い始める。相変わらず粘土板はそのまま。そのうち粘土板は踏まれ始める。床が片付き、ポツンと粘土板だけが残る。とうとう女教師が拾って片付けた。

感想 17 はたして女教師は粘土板を片付けるべきであったか？

状況 18 松浦は球状の発砲スチロールに針金を刺したものを、右手でぶらぶらさせ、左手に道具をもって帰っていった。片付けに合格したグループは順次帰っていった。

教師が作業の中止を呼びかけた頃に興がのり、教師の指示を聞かないで半ボトル5つを組み合わせるのに夢中になっている松浦と横田と松原の三君に対して、どう指導すべきであったのか。勝手なパフォーマンスをする、他者の発言を聞かないでいつまでもペットボトル5つにさわって組立てている、ふざけながら友達と話して、日直の挨拶をする児童、床の粘土と粘土板に気付かない教師、女教師は粘土板を片付けないうで問題にすべきではなかったか。

さらに考えさせられたのは、研修会での授業者の発言内容であった。

1-2 【研修会】でのメモ

【研修会】

H先生（授業者）の発言

朝からハプニングがあった。作品の完成は6時間が目安。本日の授業は6分の3時間目に相当する。1時間延長して、その1時間は作品鑑賞にあてるつもり。材料の発砲スチロールは、低学年には扱いやすい。軽しい、しかも立体が表現できる。他の材料、たとえば木切れでは形が決まってしまうし、牛乳パックや紙では弱い。その点、発砲スチロールは自由にできるし、立体を作る上ではよい。そして、遊園地は子どもにとってイメージしやすい。従来では、「着想実現」といったように初めから青写真があった。本授業では、自由に考えを出させ、固定観念を取り除くことを目的としている。ただし一言、「透明なものがよい」とは云っておいた。紙のものでも作りたければ加えてもよい。社会動向としては知的重視になっている。

感想 18

「発砲スチロールは自由にできるし、立体を作る上ではよい」という考えは理解できる。自らは子どものときに楽しんだ覚えがある。しかし、発砲スチロール自体は、頑丈で耐久生のある素材とはいえない。工作するにはむしろ難しい素材である。紙やボトルなどのプラスチックを組み合わせるとなおさら扱いが困難になる。むしろ、発砲スチロールだけで、様々な立体を表現させる方がよいのではないか。そうすることで、子どもは発砲スチロールの性質を体験しつつ理解し、独自の考えをまとめていけるのではなからうか。鉛筆1本で字を書かせることだってそれは造形に値する。それぞれ字に個性あるように、題材を統一しても個々の違いが出てくる。これこそが個性であって、発想の違いだけが個性ではない。

板書：発想 イメージ 収斂

説明：算数、理科などのパターンと図工教科の特性の説明

正答	個 個 個 個
+ - - +	+ - + + - + + - + + - +
↑ ↑	↓ ↓ ↓ ↓
+ - + + - + + - + + - +	+ - + + - + + - + + - +
個 個 個 個	答 答 答 答
+ - + + - + + - + + - +	+ - + + - + + - + + - +
算数, 理科などのパターン	図工教科のパターン→このパターンが図画教科の特性。他者のよさを認め合うことができる。

先生の発言

明治はおろか大正時代の自由画教育といえども作品をきれいにつくろうとしている。子どものよさを活かすにはそういったものは邪魔である。

感想 19

「明治はおろか大正時代の自由画教育といえども作品をきれいにつくろうとしている」という考えには同感。しかし、子どものよさを活かすために美の概念は邪魔かといえば、そうではなからう。子どものよさと美の概念は相反するものではないはず。

授業についての質問

質問 A1：①小さい作品の紹介のとき端の子どもには見えない。

②途中不出来の作品の子どもはどうするのか。

先生の回答：①については、もう少し考慮する。

②については、本人が気にいらなくなったときに次の手段を考える。自分の美的価値観を押しつけない。子どもに白い画用紙を与え、「顔を描いてごらん」と指示したとする。アヤイのように描く子が出現する。

ア	イ
+ - - - - +	+ - - - - +
+ - - - +	
	++
+ - - - +	++
+ - - - - +	+ - - - - +

ア、イのような子どもの絵が出てくるのか。なぜ、そうなるのか。資質の問題、すなわち子どもの個性の問題である。無理して、イの資質の子に、アのように描くように指導はしない。

感想 20

「自分の美的価値観を押しつけない」ア、イのような絵がそれぞれあってもよい。「ア、の資質の子に、イのように描くように指導はしない」には賛成。

質問 A2：情報交換の時代に、自己満足で終始してもよいのか。

先生の解答：記憶に無し

感想 21 ソビエト科学アカデミーは、イデオロギー体制によって、次第に情報交換の場を捨て、独自の開発体制をとるようになった。その結果どうなったか。むかし、ソビエト兵士が亡命するために、低空飛行で日本の航空領域に侵入し、国内の飛行場に降り立ったことをおぼえているだろうか。このため自衛隊の面目は丸潰れになったが、これを機会にとばかり、ソビエトの引き渡し要求を無視し、その戦闘機を解体・調査した。なんと、その機械内部には、すでに日本では見かけなくなっていた真空管が使われていた。真空管をつかって、世界に注目されるような、垂直に上空できる最新型ジェット機をつくりだせるのである。まさに独自の芸術としかいいようがない。このことによっても、情報交換と自己満足とは別の観点で成立する事象であることがわかる。情報交換はあくまでも自分自身を満足させるためにあるべきで、過剰に反応して、比較意識を高めてしまうと、かえって個性、文化に序列をつけてしまいがちになる。芸術の領域は、自然科学より一層、唯我独尊の境地を重んじてよいはずである。情報交換の時代だからこそこういった境地は、あらためて大切になるのではないか。

質問 B：技術的なものを系統的に教えていく必要もあるのではないか。

先生の回答：技術の（問題）は一回で身につくものではない。この学年であれこれの技術を教えないといけないという規定はない。たとえあったとしても、文部省の考えが必ずしも正しいとは思わない。私は、作品を作る過程での体験を重視している。まず、ウサギを生徒に抱かせる。描くときに、それがブタになってもよいではいか。「造形遊び」という観点ならば、さほど技術にとらわれる必要はない。遊びに技術の修練が入ってくると、それはもう遊びではなくなる。子どもは遊べなくなる。楽しさもなくなる。技に遊びが入ってくるのは熟練の或であって、これは専門技芸での話。

感想 22 技術と遊びと、別々の課題を設定して授業を行うのがよいのではないか。技術習練には、クリア基準も評定も設定できる。ものを美しく、上手、工夫して作れるという作業は必要である。東南アジアの残兵だった横井正一さんは、洞窟にこもり、弾丸から釣針、縫針をつくり、ありとあらゆる生活用品を自らの手でつくっていた。それと対照的なのは小野田少尉である。軍人としてのその精神性には感服するが、彼は、村を襲撃して、他者からものを奪うことで生活用品を手に入れていた。いつの時代でも、生産性やそれを支える技術がなければ悲劇が起こる。かつての日本の戦略戦争もしかり。科学の発展は、技術そのものの改良から生まれてくる。ガリレオ＝ガリレイが望遠鏡を改良した時点から、キリスト教的世界観は科学に負けたといえる。精神性だけでは真理を解明できないことに人々は目覚めさせられたのである。反面、自然科学への盲目的信仰がはじまった。自然科学の原理に沿ってさえすれば、安心するようになった。特に未開発の研究領域ほどその傾向は強い。そして、「なぜ、何のために」を問い直す新しい哲学はいまだ生まれてこない。おそらくこの先、子

どもの「遊び」を含めた一切の精神に関するものは、「唯脳論」で説明される時代がやってくるだろう。

質問 C：遊園地をテーマにしても遊園地がどこにでもあるわけではない。遊園地のない地域の子どもは、それをイメージしにくいのではないか。

先生の回答：もちろん、地域によってテーマをかえる。子どもは体験がよく働く。地域身辺のものを取り入れる。子どもに要求し過ぎているのではないか？子どもが自分で方法をあみだして、自分で作る必要がある。

質問 D：接着する技術など技術はどうするのか？

先生の回答：発砲スチロールを溶かす接着剤も確かにあります…。

感想 23 こういった問題は生活科にも応用できる。木工用ボンド、瞬間接着剤、セメダインなどで、発砲スチロールを溶かしてしまうのはどれか？

質問 E：③共同製作の意味をどう考えているか。

④従来の観点からして、表現から立体へ移行するのは？

先生の回答：③については、従来の共同製作に対して疑問をもっている。自然発生的共同製作がよい。

④については、必ずしも表現から立体へ移行するとは思わない。成熟感の中で立体から表現へ移行する場合もある。

感想 24 発生的共同製作であれば、グループ化・組織化の利点を本当に理解できるであろうが、上から押しつけられた組織化ほど嫌なものはない。

質問 F：造形遊びの位置付けをどうすればよいか。

先生の回答：スズランテープのプリントをよく読んでもらいたい。そこに私の造形遊びに対する考えが書いてある。スズランテープを巻き付けているうちに、子どもは途中から足りない色に気が出す。教師は、子どもが活動し始めたら口を出さないこと！

子どもの表現を見つめる。子どものよさを見つける。子どもの活動を認める。この3つの「み」が私の信念である。

感想 25 美術的立場で位置付けするか、教育的立場で位置付けするかで、多少価値観が異なってくる。この先生は、あくまでも教育的立場で解釈しているようである。

授業者は、低学年には発砲スチロールは扱いやすく、軽いし、牛乳パックや紙よりも強く自由に加工でき、子どもにとってイメージしやすい遊園地を立体的に表現できると考えている。ここで指摘しておきたいのは、立体形をイメージするならば、むしろ着想を実現するための青写真が必要である。青写真を取り除けば、自由に発想し、固定観念を取り除くことができるか、ということそうではなかろう。自由に発想し、固定観念を取り除くことと知的重視は相反するものではない。板書が

示す算数、理科などのパターンと図工教科のパターンを比較しつつ、図工教科の特性を観念化しようとしていることこそ問題なのである。感想18にもメモしておいた「発砲スチロール自体は、頑丈で耐久生のある素材とはいえない。工作するにはむしろ難しい素材である。紙やボトルなどのプラスチックを組み合わせるとなおさら扱いが困難になる。むしろ、発砲スチロールだけで、様々な立体を表現させる方がよいのではないか。そうすることで、子どもは発砲スチロールの性質を体験しつつ理解し、独自の考えをまとめていけるのではなかろうか。鉛筆1本で字を書かせることだってそれは造形に値する。それぞれ字に個性あるように、題材を統一しても個々の違いが出てくる。これこそが個性であって、発想の違いだけが個性ではない」という意見は、22年後の今日でも変わらない。

イメージ形成も固まらず、きれいにつくらなくてもよい、という教師の暗黙の理念が子どもたちに何をどうつくってよいのか、活動の意義を失わせていると言えよう。授業に対する質問A1の②「途中不出来の作品の子どもはどうするのか」という疑問は、まさにその弱点を突いている。教師に対する回答は、不出来を個性の問題にすり替え、「指導はしない」である。

一方、質問A2「情報交換の時代に、自己満足で終始してもよいのか」に対する教師H先生の回答を記憶していないのは、感想21が示すような自己推考に陥っていたからであろう。質問B「術的なものを系統的に教えていく必要もあるのではないか」という疑問に対する授業者の回答によれば、彼はこの題材を「造形遊び」なのか「工作」なのか明確に判断できかねる活動をさせていることになる。「作品を作る過程での体験を重視」という観点ならば、より「造形遊び」のほうが過程重視の役割をこなす。しかも素材や無形物、場の空間、体全身の活動を通して実践する。そのためには、何をつくるのかイメージ形成は必要ないことが多い。

しかし、ウサギを児童に描かせるならば、つまりウサギを描くという目的とイメージ形成が最初にあるならば、ウサギがブタになってはいけいのである。「造形遊び」ほど、技術修練の場に相応しい教材はないのに、「遊びに技術の修練が入ってくると、それはもう遊びではなくなる。子どもは遊ばなくなる。楽しさもなくなる」というのは、教師の力量の問題であり、優れた教師はいつの間にか「造形遊び」によって技術習得の目的を果たすこともできる。22年前は、本稿執筆者自身も「造形遊び」概念がよくわからなかった。そこで感想22のような自己陶酔的な推考を展開している。

現在では、もちろん質問C、D、Eに対する本稿執筆者自身が、教師H先生とは異なる見解を形成している。地域性の考慮、接着剤の検討、共同製作の意味と評価・評定、表現から立体へ移行するカリキュラムなど、それらはすべて教材研究の視点で解決しておかなければならない事項である。これらの事項については、別項で論じたい。

ここで最も重要な課題は、質問F「造形遊びの位置付けをどうすればよいか」という点にある。「教師は、子どもが活動し始めたら口を出さないこと！子どもの表現を見つめる。子どものよさを見つける。子どもの活動を認める」という3つの「み」の信念は立派である。しかし、学習行為・成果に対する評価・評定はどのようにすべきか。その疑問が、次の研修終了後に個人的に質問した内容である。

1-3 【研修会終了後、H先生に個人的に質問】でのメモ

【研修会終了後、H先生に個人的に質問】

質問 1：評価はどうしているのか。

先生の回答：生徒がのってくるかどうか考えながら教材を提供している。子どもの反応が自分の評価にもなる。子どものよいところを見つけてやる。そうすれば、自分も気持ちがよくなる。子どものよいところを見てどう感じるか、これが重要である。子どものよいところのすり込みがうまくいくとよい。今の子どもはシビアで、すり込みが難しいが、たとえ5分間だけでも効果はある。評定はなくした方がよい。

質問 2：この学校では、評定をどのような基準でおこなっているのか。

先生の回答：3年生までは評定はおこなわない。4年生からおこなうが、ただし絶対評価である。以前は、全学年にわたって評定はなかった。おおまかな基準はある。つまりA、B、C。私はAばかりつける。Cはつけない。子どもの自由にさせておいてCをつけたら、それは詐欺師である。私は詐欺師になってしまう。地方に行けば行くほど締めつけが激しい。授業としては日頃の方が面白い。先生に申し出れば見学できる。

感想25 この回答を聞いて安心した。

【まとめ】

授業に関する見解は【分析視点】の欄に記述しておいた。補うとすれば、横田や松原の授業参加態度の違いをどう見るかである。この授業で、教師の「3つの‘み’の信念」にかなったのはどちらなのか。生産的・創造的態度であったのは、どうみても松原の方である。では、遊んで楽しんでいたのはどちらなのか。横田の粘土遊びは造形遊びではない。こういった遊びが生じたとき、どう評価するのか。やはり、「子どもの活動」として認めてしまうのか。諸々の問題はたくさんある。

以上、映像を文字で表すことが、いかに不自由なことであるかよくわかった。いくらレポートしても完全なものはない。美術史の論文が、一見すれば明解である造形をわざわざ難解にってしまうのは、やはり、文字で表現するところの限界によるものであろう。実際、授業の実践場面分析を行う際、一瞬にすべてを記述することは至難の技である。しかし、四方にビデオカメラを据えつけ、教室内での事象を網羅することは不可能ではない。そのように考えると、何ゆえにペンで記述することにこだわらなければならないのか疑問に思わざるをえない。新しい「記述」はそういったものを求めているのではない。

近年のNHK特集番組には、目を見張るものがある。特に、宇宙、人体、生命の進化などのシリーズでは、CGをつかった視覚効果によってその内容を分かり易いものになっている。将来、研究成果を発表する場合には、すべて映像のみで行われる時代がくるであろう。

研修会終了後の、授業者に対する質問1「評価はどうしているのか」という質問に対して、非常に主観的な回答である。子どもの反応が教師の評価にもなるのならば、子どもの反応だけ見て教材や評価・評価評定を行えばよい。学習目標を設定する必要もないし、到達点も気にする必要はない。

学校外のワークショップ等で実施される美術教育ならば快楽的・開放的活動のみで済む。しかし、学校教育の場ではどうなのか。質問2に対する回答が示すように、3年生までは評価はおこなわれず、4年生からおこなわれ、学習目標を達成しようとしなないマイナスの活動であってもCをつけないことを、もし学習者が知ったならば、本稿執筆者自身もまじめに図工の活動をしようとは思わない。好きになるどころか馬鹿にしてしまう。当時、**感想25**のように感じたのは、「自由にさせておいてCをつける」ことはない、という点に安心したのである。

2. この授業は「よい」授業なのか？—見学するポイントの確認—

当時、論者が考えたのは「はたしてこの授業はよい授業なのか？」ということであった。このことは授業見学に際して、誰でも考えることで、前述の授業見学記録を元に、一定の観点を構築しておきたい。そこで、次のような設問を用意して、授業見学に行く前に、見学のポイントを自律的に構築できるよう指導したいと考える。

そこでまず、この授業メモを配布して、下記の問題でレッスンしてみる。

問題 1

授業光景メモの児童の様子を観て、この授業にはどのような問題点がありますか。以下の観点で考察してください。

- (1) 三浦、松田、松原、松浦、横田、飯田、城景、中川のうち、どの子にマイナスのシンプトム（兆候）が現れていますか。
- (2) 発泡スチロールのほかにどのような素材が用意されていますか。
- (3) どのような発泡スチロールが用意されていたと想像しますか。
- (4) H先生が松原から受け取ったボトルを電気鋸の刃にあて、自分ですばやく真二つに切断し、淵をはさみで切り取り、安全にするのを松原自身にさせなかったのはなぜですか。
- (5) 松原は、先生が切り落としていきざざざをじっと見つめることで、何かを学び取ったと思いますか。
- (6) 他の子と姿かたちの点で様子の違う子に対して、どのような態度で接すべきですか。
- (7) 松浦、横田に対するH先生の指導について、改善の余地はありますか。
- (8) はたして女教師は粘土板を片付けるべきだったでしょうか。

問題 2

H先生（授業者）の発言について、どのような問題点がありますか。以下の観点で考察してください。

- (1) 当初、6時間の予定であった題材を1時間延長するつもりであるという。1時間延長することは妥当ですか。
- (2) 「透明なものがよい」という児童への助言にはどのような意図があると考えますか。
- (3) 「発泡スチロールは自由にできるし、立体を作る上ではよい」と述べている。また、材料としてペットボトルや粘土等も用意されている。「自由にできる」「立体を作る」「固定観念を取り

除く」という意図として、この授業で用意された材料は適切ですか。この発言に対する感想を参考に考察してください。

- (4) 「明治はおろか大正時代の自由画教育といえども作品をきれいにつくろうとしている。子どもよさを活かすにはそういったものは邪魔である」という発言をどう考えますか。
- (5) 「情報交換の時代に、自己満足で終始してもよいのか」という質問に対し、H先生は無反応でした。あなたがH先生であれば、この質問に対し、どう答えますか。(当時の社会背景ではなく、今日的な社会背景を考慮して考えること)
- (6) 「造形遊び」という観点ならば、さほど技術にとらわれる必要はない。遊びに技術の修練が入ってくると、それはもう遊びではなくなる」とH先生は述べています。この発言について、どう考えますか。(「教育」と「遊び」の違いを考えて述べること)
- (7) H先生は「自然発生的共同製作がよい」と考えています。今日的な社会背景を考慮して考えた場合、この考えをどう考えますか。
- (8) H先生は造形遊びについて「3年生までは評定はおこなわない」と述べています。しかし、評定は行わなければいけないものです。この授業、もしくは造形遊びについて、評定をどう設定するとよいと考えますか。
- (9) 【まとめ】に「横田の粘土遊びは造形遊びではない。こういった遊びが生じたとき、どう評価するのか」と書かれています。横田の粘土遊びについて、あなたがH先生だった場合、どう指導しますか、またどのように評価しますか。(1)～(8)までの考察を踏まえて考えること。

問題 3

- (1) あなたが一番気になる状況を番号で選んでください。
- (2) あなたが一番気にかかる感想を番号で選んでください。
- (3) 上記(1)(2)について、なぜ気になるのかを考えてください。

このように、論者の授業見学記録を足がかりとして、授業見学のレディネスを踏襲しておいて、教育実習などの事前指導などで授業見学をしたときに、自立的にその授業がよい授業か否かを見極められるようになれば、見学の意義が発生する。

3. 授業分析視点

今日の日本における美術教育の問題点が、授業の方法にあるならば、学生時代に授業を見学できることは、貴重な経験である。しかし実践の伴わない学生にとっては、授業の深い意義やなぜそのようになっているのかまではわからないことかもしれない。せっかく見学させてもらえるのだから、有意義に活用しなければ残念なことになる。メモも取らずに少し見たくらいの思いつきのような感想文やレポートを作成させるだけならば、大学教育学部における学習指導の目標達成の成果は確認でない。きちんとメモを取り、そのメモを自己精査して問題点を探る構えが必要である。

本稿執筆者の見るところでは、入学間もない大学生のメモを取る態度は修練されていない。格段に発達した電子機器、プレゼンテーション・ソフト等を利用する授業形態の変化、アクティブ・ラーニング技法の導入による感覚的な授業論など、講義ノートの作成方法も変化しているであろう。さ

れど、きちんとしたメモは、学生が、教員として、社会人として、その任を負うためにも必要なことである。

そして、見学する授業に対してどのような視点から観察すればよいのか知っておくことが、見学の意義と楽しさを覚えるのである。そこで、22年の授業見学のメモをもとに考察した観察の視点と分析の観点を提案しておこう。

まず、確認もしくはメモしなければならない事項がある。

- ①実践学校名・研修会名 ②教科名 ③単元・題材名 ④実践教師名 ⑤対象学年
⑥実施月日・時間 ⑦実施場所（実施教室） ⑧関係資料 ⑨板書内容

などである。

分析視点の設定としては、

(分析視点) (例)

ア 教材の種類……………造形遊びなのか、イメージを固めて立体で作る教材なのか。

イ 素材と発達段階との適応度……………素材の加工の難易度が発達段階に適応しているか。

ウ 教師の学習者に対する実態把握……………教室環境などのレディネスができているか。

エ 教師の素材研究度……………素材の組み合わせ方は適切か、活用している素材にあえて着色する行為は適切かなど。(素材の吟味)。

活用している素材に対する道具や技術を適切に工夫して提供しているか。(技能の開発)

教師の素材研究は十分になされているか、否かに関しては、次のような観点表（表1）も作成してみた。

教材研究の要点確認表の作成（表1）

検討度	地域性	生活観	発達段階	製作・制作	鑑賞量	芸術性		知識量	感覚量	技術量	素材観	創造性	指導方法	
						抽象性	具象性						引出型	伝授型

(○, △, ×で表記。あるいはA, B, C表記でも可)

授業者は、学習者の育成したい内容によって配分量の度合いが決定する。教材研究をする際に、教材の論理を確認するために教材研究の要点確認表を作成しておくことと便利である。上記の表は、教材研究（表現・鑑賞領域共通）をする際の最初の要点確認表である。授業見学の際に、上記のどの項目に重点を置いている授業なのか見極めるのも見学を有意義にする方法であろう。

オ 題材設定の目的と評価観点の一致……………授業のねらいと評価基準が合致しているか。

カ 授業の主体と学習者の主体……………授業の主体が教師であること、学習の主体が学習者であることの意識がはっきりしているか否か。

キ 授業の意義……………この授業によって何がどのように獲得され、何が育成されているのか、また、学習者が明確に自覚できているか。

等が考えられる。そのうえで、授業技術を確認していく。授業技術としては、
 ク 教材名の考案……学習者の興味を引くような教材名を考案していたか。(例:表2)

表2

対象学年	内 容	教 材 名 (例)
中学3年	額縁づくり	私の世界を飾るふしぎな額縁
小学校低学年	着色パスタによる造形遊び	LINE UP! DISH UP !カラフルパスタ

- ケ 効果的な導入方法の考案……学習者が早く作業に取り組みたいと思うようなモチベーションを向上させる導入になっているか。
 コ 発想の求め方……発想することに苦しみを感じて、どうしても考えが浮かばない学習者に対して、その手立てがきちんと講じられているか。

などを観察視点に設けることを提案する。

おわりに

論者の古いメモに基づく授業見学の事前学習の構想は、授業見学をよりアクティブにするための布石といえるかもしれない。図工・美術の場合、「造形・表現」という授業の学習形態からして、学習者はアクティブに活動している部分がほとんどである。見学中は、授業に関与できない。その授業は、授業者のものであるから、基本的に黙って観察していなければならない。しかしそれでも、観察眼を常に研ぎ澄まして積極的にメモを取ること、その成果を使って考えをまとめ、ときには議論し、授業というもののあるべき姿を想起することが肝要であろう。本稿では、分析視点を単純化するために「よい授業」と提起した。しかしながら「よい授業」とは何か。この問題は単純に判定できることではない。図工・美術教育の見地から言えば、常に次の展開を読んで先手を打つ視野の広さが求められる。一方個性重視の発想に立てば、どのように創造性を発揮させるか、ということになる。その他にも考えるべきは多い。1つよいところがあると1つわるいところがあるという類いのもので、一長一短、どちらを採るべきか、極めてデリケートな問題である場合もある。また授業というものは、理論通りに行くものではないということも押さえておくべきである。一度うまくいったからといって、同じやり方で次もうまくいくというものでもない。経験は糧となる。そして、失敗を糧として、次の手を考えていくものであろう。授業記録に基づく授業内容の検討は、授業改善を意識的に進める糸口となる。そうした方策を検討することは次の課題と考えている。